

現代の無筆

松浦 俊博

高齢者へのワクチン接種申込が始まった途端、NTTが電話回線を制限しなければならぬほど混乱した。新聞によると高齢者はネットに慣れていなく、電話申し込みに殺到して回線がパンクしそうになったとのこと。コロナ禍の中、日本がIT分野で世界の劣等生であることを思い知ったが、「またか」と恥ずかしくなった。

江戸時代には、無筆（文盲）と呼ばれる読み書きのできない人が現代より多くいて、大家さんなどが面倒をみたそうだ。子供たちは読み書きを近所の寺子屋などで教わった。寺子屋のお陰で日本人の無筆は比較的少なかったと言われる。ところが今はどうだ。世界の標準語である英語は使えない、ITは駄目という日本人が老若問わず溢れている。彼らは江戸時代の無筆に相当するだろうし、私もその一人だと自覚している。

少年に対する教育は、日本もようやく昨年度から小学校四年生以上にプログラミング教育を必修化した。英国では五歳から教育を受けるし、台湾のIT大臣タン氏は八歳でプログラムを書いていたそうだ。日本はまだまだ遅れている。英語の授業も日本は小学校五年生から受けることになったが、韓国や中国より二年も遅い。教育の目標は「論理的思考力を身につけ社会の急速なデジタル化の中で生きられる」ことと、「さまざまな国や背景の人と関わる論理的なコミュニケーションをとれる」ことだ。これらの教育が行き届かないと、「生きる」ことや「コミュニケーションをとること」に支障が出ることになる。日本人も馬鹿ではないだろうから、紆余曲折を経ても十年経てば、かなり改善されるだろう。

高齢者も世の中のお荷物にならず牽引する側になり、日本のIT分野での平均レベルを上げたい。ゼネコンの役員だった友人が、退職前に「エクセル」を必死に勉強した。在職中は、IT関連の作業を周りの人に頼むことで無筆になっていた。教えてくれる人が身近にいるうちに何とかしようとした彼は、間に合ったようだ。

退職した高齢者である私の、無筆から抜け出すための努力。まず、後輩・家族・友人の家族などの若者と話せる関係を保ち彼らから学ぶ。次に関連するIT分野の資料を集めてそれらを手本に操作方法を自分で解読する。口ではなく自分の手を動かし、社会の変化から取り残されないよう努めるしかない。